

先人の言葉から学ぶ（その2）

倭し美し（美しき郷土を愛する心）

出典・・・古事記

1 古事記の成り立ち

今回のテーマは、古事記の「中巻（なかつまき）」にあるヤマトタケル物語の歌からである。古事記と聞くだけで敬遠されそうだが、幼少時に耳にした中に「因幡の白ウサギ」、「天の岩戸」、「八岐の大蛇」の説話を思い浮かべることができるだろうし、出雲大社なら祭神が大国主命と気付く人は多いはずである。

古事記は、第40代天武天皇（631～86年、在位673～686年）が清原（奈良県飛鳥の「浄御原」のこと）にあつて、『自分が聞く限りでは、「帝記（天皇系譜）」や「本辞（故事伝承）」は、伝承する人や家系によって真実と違っていたり、ときには誤りと偽りがあるとされている。今の時代にそれを正さなければ、幾年も経たない内に本旨や真実が無くなるであろう。これは国家組織の要諦であり天皇治世の基本であるから、それらを克明に調べ後世に伝えようと思う』のお言葉が発端となって、舎人（天皇の警備や雑用係）の一人で記憶力抜群で賢い28歳の稗田阿禮（ひえだのあれ）が作成を仰せつかりながら、時勢の移り変わりが激しく完成に至らなかった。

その後、第43代元明天皇（661～721年、女帝で在位707～15年）の御代になって、天武天皇のときと同様に「帝記」の誤りを正そうとの思し召しから、和銅4年（西暦711年）に太安萬侶（おおの やすまろ）に編纂を命じ、稗田阿禮が天武天皇以来調べてきた言葉を安萬侶が記録し、翌年（西暦712年）献上された「上巻（かみつまき）」の序文に



伝・太安萬侶画像

記される、日本最古の歴史書である。

なお、古事記に遅れること9年、日本書紀（註：参照）が完成している。この二つの勅撰史書を合わせて「記紀」と呼んでいる。

また、古事記と日本書紀の記載内容は、人物の捉え方や内容が必ずしも一致しているわけでない。ここでは古事記の記述をもって述べつつ、必要な場合に限り付記する。

今回のテーマは、現代の生き方と直接関係はないように思われがちだが、古を振り返れば、末裔である私たちに示唆するところ多くあるので取り上げた。

註：日本書紀は、同じく元明天皇の命によって、舎人皇子（676～735年、天武天皇の皇子で第47代淳仁天皇の父）が統括編纂した史書で、全30巻、系図1巻からなるとされるが、系図は失伝してしまった。内容は年次的な構成となっている。

2 ヤマトタケルと「倭し美し」の歌

ヤマトタケル（73頃～113年頃）は、古事記では倭建命（やまとたけるのみこと。註1）、日本書紀は日本武尊（やまとたけるのみこと）と記載されている。

ヤマトタケルは景行天皇（第12代天皇）の第3皇子として生まれ、名を小碓命（をうすのみこと。註2）と呼んだ。

成人したある日、父天皇が言い付けたこととの行き違いから次兄の大碓命（おおすのみこと、双子の兄の説あり。）を殺してしまい、日頃の乱暴な振る舞いと合わせ父天皇から疎まれ、過酷な外敵征伐を命じられる。

16歳の時、九州地方で叛乱を起こした現在の熊本県球磨郡辺りを本拠とする熊襲建（くまそ たける）を名乗る兄弟の討伐を命じられ、熊襲建の新宅祝いに女装して同席し、油断した兄を先ず刺し殺し、次いで弟建を一刃突き刺すと、『止め刺すのを待ってくれ。あなたは、何方ですか。』と聞かれた。ヤマトタケルは天皇の皇子で服従しない者を討伐に遣わされたと身分を明かすと、『正しくそうであろう。西方には自分たち兄弟以外に武勇の者はいない。大和の国（註3）には我々に勝る強い方がおられた。恐れながらお名前を献上しよう、これからは倭建命と称されるがよかろう』と。それを聞くや、皇子は止めを刺した。以後、倭建命（以後、この表記とする）と名乗るようになった。



堺市大鳥神社の倭建命銅像

九州地方の平定から帰還した倭建命は、次いで出雲の国（島根県）の出雲建（いづも たける）を撃ち、かの地を従えて都に帰った。この出雲遠征は日本書紀に記述はない。最後に朝命を受けて出向くのは東方への遠征であった。このとき倭建命は『父天皇は、自分が死ねばよいと思っているのだろうか』と嘆いたという。

遠征の途中で立ち寄った伊勢神宮（祭神・天照大神）で、祭主で叔母の倭姫命（やまとひめのみこと）から授かった神剣「天叢雲剣」（あめのむらくものつるぎ。後「草薙剣」呼ばれ天皇家三種の神器の内の一つ）と、火打石の入った布袋を戴き東方へと進む。

- ① 野中で敵から火攻めに遭うと、神剣で草を薙ぎ払い、逆に火打石を打って火を放ち相手を焼き殺して難を逃れたことから、焼津（静岡県）の地名起源となった。この時から「天叢雲剣」を「草薙剣」呼ぶようになった。
- ② 横須賀（神奈川県）辺りで海を渡る際、海が荒れて船が遭難しそうになり、お后の一人である弟橘媛（おとたちばなひめ）が人柱となり入水すると、波は静まり無事渡り切った。七日後に媛の櫛が海岸に流れ着き、御陵（ごりょう）を築き櫛を納めた。このような物語を知っている人は多いかと思う。

古事記では、現在の関東平野の大部分と山梨県、そして長野県、愛知県方面まで平定し大和へと帰還の道を辿るが（註4）、途中の岐阜県と滋賀県境の伊吹の戦いで人事不省の病に罹り、やや健康を取り戻し現在の三重県亀山市辺りに到ったとき、

『倭（やまと）は 国のまほろば ただなづく 青垣 山隠（やまこも）れる 倭し美（うるわ）し』

他三首の歌を詠み、大和を懐かしみ偲びつつ無念のうちに亡くなられた。（註5）

残り少ない余命を察した倭建命は、それまでの人生を顧みる心情も見事に、この歌それ自体美しい韻律をもっており、秀歌であること相違ない。

語彙の解釈だけ述べておくので、後は口ずさみ倭建命の気持ちを察してほしい。

倭～大和の国で、奈良時代まで歴代天皇の都があったところ。まほろば～「ま」は美称、「ほ」は秀でている、「ろ」は接尾語、「ば」は所。ただなづく～幾重にも重なりあう。山籠れる～山に囲まれる。倭し～「し」は他の言葉についてその文を強調する副助詞で、「・・・こそ」「・・・さえ」に通じる。

倭建命の死を聞いた父天皇は、寝食もとれないほど嘆き、大和からお后や皇子たちが訪れ陵墓を築き祀ったところ、亡骸は白鳥となって都を目指して飛び立ち、後には着衣だけが残されたという。

倭建命と、第11代垂仁天皇の皇女との間に生まれた皇子が、第14代仲哀天皇である。

註1：倭と大和は同義で、古い時代に中国が日本及び日本人を「倭国」とか「倭人」と呼んだもので、日本では後に「和（大和）」または「和人」と改めた。倭の字そのものは「和」の意味と無関係。

註2：読み名の「をうす・・・」、「おおうす・・・」は、旧来の表記（特に、武田祐吉譯註の「古事記」を参考にした。）に倣った。

註3：「大和の国」は現在の奈良県を指すが、奈良時代まで歴代天皇治世の都があったこ

とから転じて「日本国」のこと。また、大和はヤポンやジャパンの語源となった。
註4：日本書紀では上総（千葉県）から海路を渡り北上川下流域（宮城県）の陸奥まで
平定した後甲斐に至ると、コースが異なる。

註5：古事記では没した年齢が明らかでないが、日本書紀では30歳となっている。また、
冒頭に書いた生没年齢そのものに諸説があって定まらない。更に、4世紀から7世
紀頃にかけて数人の朝廷関係英雄像からの作話でないかという架空説もある

3 大和と自然美

上代の日本（大和）は、自然美が豊かで恵みは多く、田畑は実り海山の幸は人々の
生活と心を潤し、絢爛たる稲作文化の最中にあった。

倭建命の西征東征は、単なる未服従人たちの制圧だけではない、暮らし向きの安泰を
広げようとする、大和朝廷の平和的な理想からでなかったかと推察できる。

日本国の古称を挙げれば、そのことが肌身をもって理解していただけたらと思う。

- ① 「蜻蛉洲」又は「秋津洲」で、蜻蛉（あきつ）はトンボの古名で、ともに「あきつ
しま」と読む。「神武紀」によれば、初代天皇の神武天皇が大和を国見されたとき、
『蜻蛉（あきつ）の譬喁（となめ）せるがごとき様である』と言われたのが始まり
とされ、トンボの雌雄が互いの尾をくわえあって飛んでいるようだとの表現である。
国見しているときも、中空一杯にトンボが飛び交い、秋の実りが黄金色に満ちて膨
らむ様子が目に映るようである。
- ② 「豊葦原」で、「豊葦原の中つ国」（豊かな葦原の中の国）とか「豊葦原の瑞穂の国」
（豊かな葦原の中に稲の実りがある国）と使われたから、ただ自然美が優れている
だけでない、豊かな暮らしと民人の安寧が広まり、天皇の治世が行き渡っている様
に対する賛美の心がある。

4 良寛辞世の歌と川端康成

良寛(1758～1831年)は、江戸時代中後期の人。曹洞宗の禅
僧で、和歌と漢詩に優れ、書家としても著名で、俗名は山本
栄蔵、又は文孝であった。新潟県出雲崎に庄屋の長男として生
まれながら18歳で出家し、岡山県倉敷市円通寺の国仙和尚に師
事し、その後諸国を行脚して48歳のとき生国に戻り、蒲原郡国
上村（現・燕市）や島崎村（現・長岡市）に住んだ。無欲無私、
恬淡な性格で生涯住職などには就かず、分かり易い説法と子
供達を愛し共に遊ぶ日々を過ごし、『子供の純真な心こそ、真
の仏の心』と解釈し、懐には常に手毬を入れていたことで知ら
れ、子供のみならず大衆から共感と信頼を受けていた。

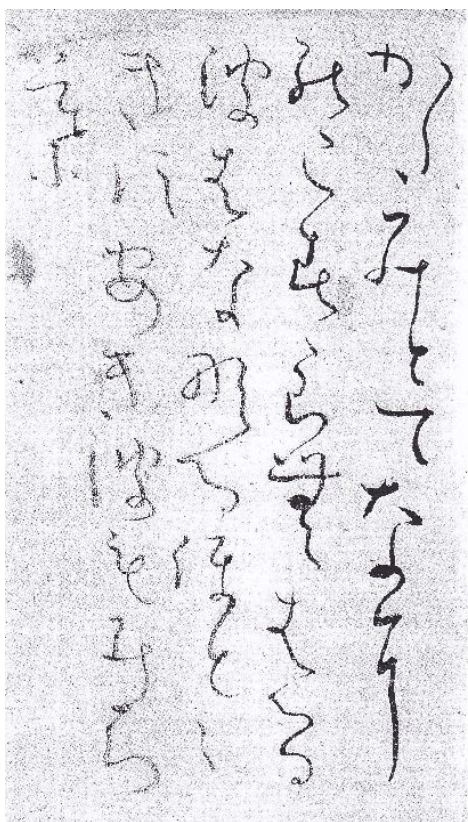


良寛坐像

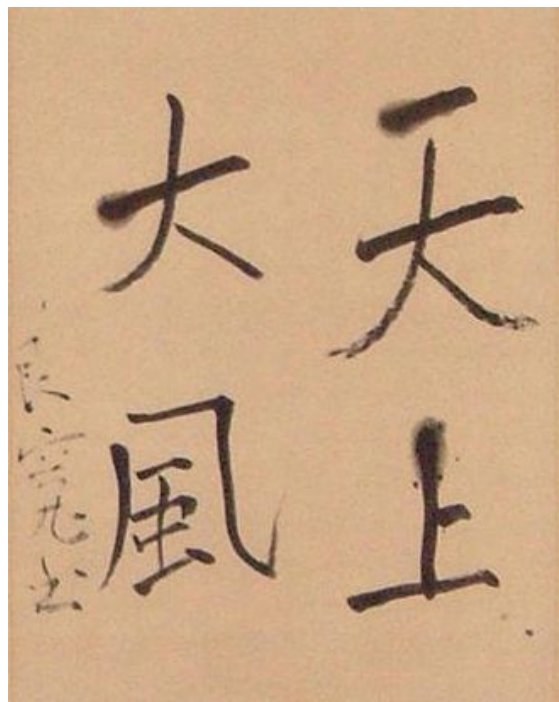
良寛は天保2年（1831年）2月、雪深い越後の島崎村におい
て74年の生涯を閉じるが、辞世の句として『**散る桜 残る桜も散る桜**』がある。

一方で辞世の歌として知られているのは

『形見とて何残すらむ 春は花 夏ほととぎす 秋はもみぢ葉』 である。



良寛辞世の歌、真筆



良寛が子供達の風絵用に書いた字

良寛は草庵に住み生涯無一物、墨染の衣をまといその日を過ごすに足りる食（じき）を托鉢により受け、まるで子供のような生きざまを悟りの世界に具現するという稀に見る僧である。辞世の歌から読みてれるように、故郷の自然に強い愛着と誇りを持ちつつ、故郷の美しさを享受し、次の世代に引き継ごうという強い意思が込められていること忘れてはならない。（註：参照）



ノーベル賞受賞式の川端康成

昭和43年（1968年）、日本人として初のノーベル文学賞を受賞した川端康成（1899～1972年）は、「伊豆の踊子」や「雪国」他の小説で知られた作家である。受賞理由として『日本人の心情の本質を描いた、非常に繊細な表現による彼の叙述の卓越さに対して・・・』であった。ストックホルムで行われた12月の受賞式には、受賞者通例のモーニングコートでなく和の正装である紋服に改め、胸に昭和36年に受賞した文化勲章を戴いて臨み、日本人として心意気を示している。

その川端も、日本の自然と国土をこよなく愛する心

の持主として知られている。これも恒例となっているノーベル賞受賞記念講演は、「美しい日本の私」と題して講じ、次の原稿が残されている。それは、正しく倭建命と良寛辞世の歌から観じた『大和し美し』であった。

『草の庵に住み、粗衣をまとひ、野道をさまよひ歩いては、子供と遊び、農夫と語り、信教と文字との深さを、むづかしい話しにしないで、「和顔愛語」の無垢な言行とし、しかも、詩歌と書風と共に、江戸後期、十八世紀の終わりから十九世紀の始め、日本の近世の俗習を超越、古代の高雅に通達して、現代の日本でも その書と詩歌をはなはだ貴ばれてゐる良寛、その人の辞世が、自分は形見に残すものはなにも持たぬし、なにも残せるとも思わぬが、自分の死後も自然はなほ美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になってくれるだろう、という歌であったのです』(原文のまま。「大和し美し」良寛生誕250年、川端生誕110年、川端康成と安田靫彦。求龍社、11頁から引用)。

更に、『この日本の美しさを享受し、次世代に受け継ぐ必要があるということ、この講演は訴えているのです』と、川端香男里(東京大学名誉教授、ロシア文学者。川端の養女・政子と結婚して川端姓となる。川端康成記念館理事長)は記している。

注：良寛辞世の歌は、曹洞宗開祖・道元の歌に元歌と思われる似通った歌がある。これは道元悟りの境地を現しているといわれている。

『春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえてすずしかりけり』がそれである。

5 本居宣長と大和心

本居宣長(もとおり のりなが、1730~1801年)は現在の三重県松坂市に生まれ、江戸時代中期の国学者、文献学者、医師で、自宅の鈴屋(すずのや)で門人に講義したことから鈴屋大人(すずのやのうし)と呼ばれた。医学は京都で学び、国学は現・浜松市賀茂神社の神職である賀茂真淵



賀茂真淵画像

淵(かものまぶち、1697~1769年)他を師とした。一時期は紀伊藩に仕えたことあるが、生涯在所で医師を生業としながら、自身の研究や門下の指導を行った。彼の業績とし

て特筆されるのは、当時解読不能になっていた「古事記」の解読に成功し、他にも「万葉集」「源氏物語」「古今集」の研究に顕著な成果を残したことにある。

彼の思想は、師の賀茂真淵の影響から、外来の儒教など



本居宣長画像

の偏重には批判的で、又『学ぶうちに良き考えが出てきたなら、必ずしも師の説と違うところあったとしても、自説を主張するに憚ることはない。』とするところであった。その本居宣長の歌に

『**敷島の大和ごころを人とはば 朝日にほふ山ざくらばな**』がある。

この歌から、本居宣長が日本人として生まれてきてよかったという思いが感じ取れないだろうか。日本人の純粹性と潔さ、自然環境の厳しさなどに挫けない強靱さ、自己主張よりも周囲に同化できる謙譲の心、あまねく思いを掛ける惻隱の情など、誇り得る資質を持つという自負心が現れている。

また、新渡戸稲造（1862～1933年）は、明治33年（1900年）英文で執筆し世界的なベストセラーとなった名著「武士道」（原題 Bushido: The Soul of Japan）第15章において、ヨーロッパ人が好むバラと、日本人の心の支えとなるサクラを対比させ、それぞれ民族性の違いとなって現れると記している。

ア 日本人のサクラを好む心情は、サクラの花の美しさには気品があり、優雅であることが日本人の美的感覚に訴えるところがある。

イ 私たちは、ヨーロッパ人のバラの花を愛でる心と分かち合うことはできない。バラには、その甘美さの陰にトゲを隠している。バラのあでやかな色合いや濃厚な香りは、日本のサクラには存在しない特性である。

ウ バラの花はいつとはなく散りはてるよりも、枝についたまま朽ち果てることを好むかのようなのである。

エ 日本のサクラは、自然のおもむくままいつでも命を棄てる用意がある。その色合いは決して華美とは言いがたいが、その淡い香りは飽きることはない。

他にも、新渡戸稲造は『大和魂とは、自然に生え国土に根ざした野生のものの固有のもので、ひ弱な人工栽培的な植物とは違う。桜の花は、このように美しく、かつ儂く風のまにまに散ってしまう、ほんの一時香りを放ちつつ散ってしまうこの花の中に、大和魂はあったのだろうか』と問いかけている。

他にサクラを詠んだものに、近代日本の先駆者の一人で、長州人の吉田松陰（1830～59年、松下村塾で多くの英才を指導した）がいる。刑死の前夜に詠んだとされる歌が、

『**かくすれば かくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂**』である。

確かに、吉田松陰の持つ憂国心の反映を見ることができるが、私はこの歌が日本人として、これが大和魂だという固有の心境を言い得ているとは思わない。

何故ならば、憂国の精神と自己犠牲を厭わない英傑たちは、時代に関係なく世界中の到るところにいたからであ



吉田松陰の肖像画

る。例えば、フランス百年戦争「ジャンクールの戦い」で民衆の先頭に立って戦い、処刑されたジャンヌ・ダルク（1412～1431年）。寛文9年（1669年）6月、アイヌの総酋長シャクインが呼び掛けて決起した「シャクインの戦い」では、4か月後に和睦を餌にして騙し討ちにあったシャクインなど。枚挙にいとまない憂国の人たちの、『やむに止まれぬ』衝動から闘った人たちはいた。

幕藩体制下で頻りに蜂起したといわれる「百姓一揆」や、信仰を貫くための弾圧と戦った「島原の乱」にしても、そえぞれ決死の覚悟に変わりはない。

6 祖国と郷土を愛する心

倭建命の歌は、使命感に燃え艱難を乗り越えて、未開といわれる遠方の部族を大和朝廷に従属させるため死を賭して戦ってきた。それらの国々を合わせ美しい山野や豊かな海山の自然と恵みを思い浮かべ、大和朝廷が治める国々に対する賛美と、美しい自然美を後世に残さなければと希求する気持ちから、望郷と弥栄（いやさか）を念じながら、今生と別れの歌を詠んだと思う。

良寛や川端康成も、麗しい祖国の自然と人情は、永遠にこのまま続いてほしいと願ったであろうこと容易に想像できる。

ところが、今や「自然破壊」、「環境汚染」、「乱獲乱伐」、「地球温暖化」「内分泌攪乱物質（環境ホルモン）」などが地球規模で問題視されながら、諸々の解決策まで未だ遠い道のりである。これらが「砂漠域拡大化」、「慢性的食料不足地域」、「水不足地域」、「貧困と人口増加の問題」など加速的に招いているとすれば、やはり「東日本大震災」に伴う「福島第一原発事故」と同様に人災といえる。

大方の心ない人類の「おごり」、「傲慢」、「驕奢（ぜいたくの意）」を見直す決意が求められている。

太平洋戦争の敗戦により、GHQ（連合軍最高司令官総司令部。ポツダム宣言執行のため、日本において占領政策にあたった連合軍の機関）は、「仇討」や「敵討」、「切腹」など日本人の精神を恐れ、国土愛とか愛国心をことごとく封鎖する政策を行った。その結果は、GHQ側からすれば予想以上の成果を挙げたといえるかもしれない。

7 祖国や郷土愛と中学校武道必修化との関連

平成18年（2006年）12月22日、「育基本法」（昭和22年3月31日制定、法律第25号）の全部が改正された。この改正は、旧法の施行から60年の歳月を経て行われたことになるので、私は政治あり方に問題があったと思っている。新「教育基本法」第1章、第2条（教育の目標）の関連する項を見れば、

四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する。

五 伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する。

となっている。

正しく今回のテーマである祖国と郷土を愛する心、それらを古い伝統の中から学ぶことによって、輝かしい光明を見つけ出そうとする意向がうかがえるため、平成24年度から全国一斉に実施される「中学校武道必修正課」への基因となったと考えられる。ただし、制度を作ったからといって、安直に期待感を抱く訳にもいかないのではと危惧するところ大である。

67年間の空白を埋めるには、一気に事は成就しない。はたして何年掛かりの教育事業となるのだろうか。

(この項おわり)